

食生活とエコロジー思想

聖徳大短大 ○ 小笠原規子

目的 従来、食生活についての研究は主として「人間の健康のための食生活」という視点からなされてきたが、近時「人間の健康と地球の健康のための食生活」を標榜する研究が目立つようになってきた。そこで、このような食生活についての研究の動向を歴史的側面と理論的側面の両面から検討し、食生活の研究の分野にエコロジー思想がどのようにして入りこんできたか、今後の課題は何かについて考察する。

方法 1977年2月アメリカの上院に提出されたいわゆる「McGovern報告」と、このころからアメリカに出始めた肉を用いない野菜や豆などの料理の効用を説く調理書や食生活に関する研究書等文献の検討とこれに基づく考察による。

結果 アメリカでは、1970年代から肉食中心の食生活の「人間の健康」に対する弊害が指摘され、野菜や豆等の料理の研究が目立つようになったものの、当初は「地球の健康」という視点はみられなかったが、80年代後半になると、「地球の健康」という視点も重視されるようになった。これを支えるものは、いわゆるエコロジー思想であり、「人間と地球の健康のための食生活」を目指すもので、その実現のために必要なこれからの課題は、人間もエコシステムの中に組み込まれているという認識（いわゆる機械的世界観から関係的世界観への転換）と、肉に代わる蛋白質についての研究、とりわけ蛋白質補完の原理についての研究を深めることである。